物事に生き生きと取り組む　子供たちをめざして

足利市立松田小学校

1．研　究　主　題

物事に生き生きと取り組む　子供たちをめざして

・自然との積極的なかかわり
・基礎・基本の定着
・人と人との豊かなつながり

～ 一人一人を大切にした授業を展開するための工夫 ～

2．研究主題設定の理由

小学校学習指導要領が改訂され，学力に対する考え方が変わってきている。いわゆる新しい学力観を身につけるということである。この新しい学力観に基づいて学習指導を行い，児童の「生きる力」をどのように身につけていくかが課題となってくる。

現行の学習指導要領のねらいでは，

(1)　心豊かな人間の育成　(2)　自己教育力の育成　(3)　基礎・基本の重視と個性教育の推進

(4)　文化と伝統の尊重と国際理解の推進

が，あげられている。

また，第15期中教審答申の中の「生きる力」を育む視点をまとめてみると

(1)　学習意欲，生活意欲の掘りおこし　(2)　感性を豊かにし，表現力を育てること

(3)　教育内容の精選と基礎的，基本的内容の定着　(4)　合科的学習や総合学習の積極的導入

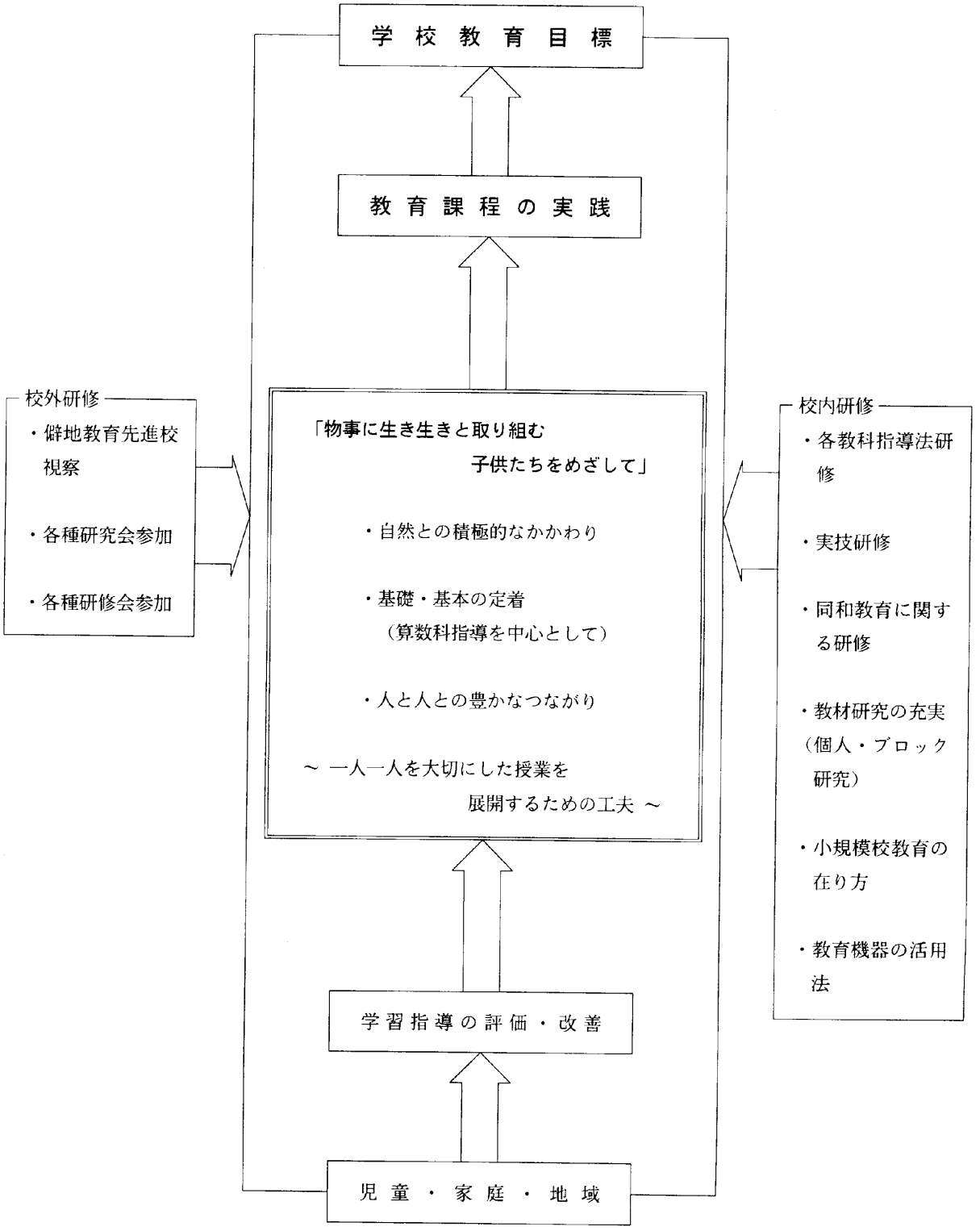
(5)　体験的学習，問題解決的学習の重視　(6)　自己評価力を高める指導

と考えられる。

今回，栃木県へき地複式分校教育研究大会としての主題を考えるにあたり，学習指導要領のねらいにそった研究主題の設定，また「生きる力」を育む視点から考えたとき，本校の学校課題である「物事に生き生きと取り組む子供たちをめざして」が，このことと一致すると考え，学校課題をそのまま研究主題として設定することとした。

さらに，研究主題に迫るべく「自然との積極的なかかわり」「基礎・基本の定着」「人と人との豊かなつながり」の三つの項目を研究の中心となる三本の柱として取り上げた。特に「基礎・基本の定着」を図るために，少人数であるというへき地校の特色を生かし，「一人一人を大切にした授業を展開するための工夫」を算数科の指導を通して研究実践をしてきた。また「自然との積極的なかかわり」「人と人との豊かなつながり」では，特別活動を中心として研究実践してきた。

3．研究の全体構想


学校教育目標
教育課程の実践
「物事に生き生きと取り組む
子供たちをめざして」
・自然との積極的なかかわり
・基礎・基本の定着
（算数科指導を中心として）
・人と人との豊かなつながり
～ 一人一人を大切にした授業を
展開するための工夫 ～
学習指導の評価・改善
児童・家庭・地域
校外研修
・僻地教育先進校視察
・各種研究会参加
・各種研修会参加
校内研修
・各教科指導法研修
・実技研修
・同和教育に関する研修
・教材研究の充実（個人・ブロック研究）
・小規模校教育の在り方
・教育機器の活用法

4．研究の内容

(1) 研究の概要

研究主題「物事に生き生きと取り組む子供たちをめざして」に迫るべく研究の中心となる三つの柱「自然との積極的なかかわり」「基礎・基本の定着」「人と人との豊かなつながり」を設定し研究実践してきた。

○「自然との積極的なかかわり」 ―――― 遠足，宿泊学習，収穫の行事等

○「基礎・基本の定着」 ―――― 算数科の指導を通した研究実践

（一人一人を大切にした授業を展開するための工夫）

○「人と人との豊かなつながり」 ―――― 縦割り班活動，地域の人々との交流を通した研究実践

(2) 具体的な取り組み

本校は，周りを山に囲まれ，緑豊かな自然に恵まれている。その自然に積極的に親しむことで，より豊かな心を育て，より確かな人間関係を築き楽しい学校生活がおくれるものと考えた。また，基礎・基本の定着を図るため，恵まれた自然を積極的に活用した学習活動の展開を工夫しようと考えた。毎年4月に行う生活班編成は，各学校行事，特別活動の中核ともいえるもので十分時間をかけ話し合いを行なっている。

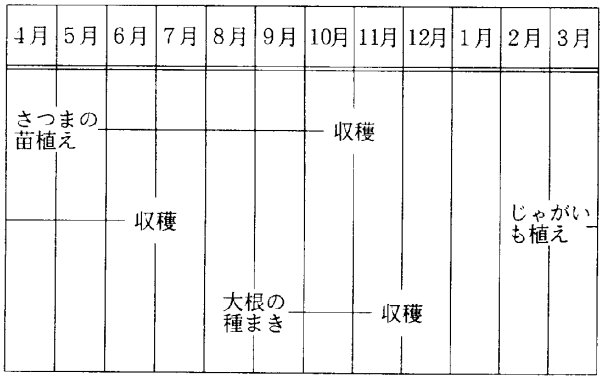
ア 「自然との積極的なかかわり」

○ 生活班遠足・・・ この遠足は，1年生歓迎の意味を込め，例年4月に実施している。春の日ざしの中で，草や木の芽吹きや小鳥のさえずりとふれあうよい機会である。この遠足を通して，児童は，自然に親しみ自然の美しさ，すばらしさを十分に感じているはずである。

○ 宿泊学習・・・ 全学年参加による，名草セミナーハウスへの2泊3日の宿泊学習である。ハイキングや，花火大会，野外炊飯などを通して，初めて参加の1年生を含め全員楽しく活動している。山や木々など自然に囲まれた中での宿泊学習は，自然にふれあうよい機会である。

○ 植物を育て・・・収穫する喜び 五月下旬の「さつまの苗植え」に始まり，三月中旬の「じゃがいも植え」まで1年間を通して，児童は植物を育て，収穫する喜びを味わっている。収穫した作物は各家庭へ持たせたり「焼きいも集会」など学校行事に役立たせる一方，自分で育て成長の過程を見ることにより，植物への興味関心を持ち自然とのかかわりに大切な役割を果たしている。

〔年間収穫暦〕



イ 「基礎・基本の定着」(算数科指導を中心として)

基礎・基本の定着を図るために「一人一人を大切にした授業を展開するための工夫」を行った。特に「実態調査」「個に応じた支援の工夫」において次のような取り組みを低中高学年で行った。

(ア) 実 態 調 査

・準備テスト，事前テストを実施し，実態調査表の中に児童の誤答した数字や図形などを記入し，児童のつまずきを把握した。

(イ) 個に応じた支援の工夫

・導入の工夫，作業用紙の活用，具体物の提示や操作，学習問題の工夫

○ 低 学 年

1年生の「たしざんとひきざん‥1」，2年生の「ひき算‥2」の学習において，1年生では「買物ごっこ」，2年生では，本校で収穫した「じゃがいも」を使ってそれぞれの学習問題作りを行い関心・意欲を引き出す工夫をした。また，作業用紙や学習カードなどを使用することで，学習状況（願い，思い，つまずき）を把握し，個に応じた支援を行うことにより，本時の目標に迫ることができた。また，研究会当日の授業では，1年「ひきざん2」2年「かけ算2」の学習において「じしゃくあそび」(1年)「じゃんけんゲーム」(2年）を導入に取り入れ，児童の関心・意欲を引き出す工夫を行った。この導入により，児童は本時の課題をより明確に理解し，次の段階の立式・計算へと進むことができた。また作業用紙の活用や具体物（おかし等）の操作を行うことで，児童の学習意欲の継続や児童一人一人に対する支援が容易に行えた。

○ 中 学 年

3年生の「巻じゃくのしくみ」の学習においては，児童一人一人の立ち幅とびの記録を導入とし，意欲的に学習ができた。また4年生の「折れ線グラフ」の学習においては，事前の温度記録をもとに，自分で自由なグラフをかき，発表することができた。また研究会当日の「面積」(4年）の授業において実態調査を基に学習課題を設定し，ヒントカードや個別学習機を活用し，問題解決に役立たせることができた。特に，支援の必要な児童には効果的であった。

○ 高 学 年

展開の中において，児童のさまざまな発想に対処するために，5年生の「分数のたし算とひき算」の学習においては，折り紙や面積図，6年生の「線対称の形」の学習では，図形の識別掲示物，たこの設計図など児童一人一人が自分の考え方を発表できるように，教師側の準備が行われた。また研究会当日の5年「単位量あたりの大きさ」6年「立体の面積と体積」の授業では，導入において児童の登校時のVTRの活用（5年）や自作発泡スチロール切断機（6年）などを使用し，児童の学習に対する意欲付けと関心を持たせるのに役だった。また作業用紙の数直線シート（5年)・予想カード（6年）などの活用により，児童一人一人の考えがまとまり，発表することができた。

ウ 人と人との豊かなつながり

○ 縦割り班活動

学校生活のあらゆる場面において，児童一人一人が自分の行動に責任を持ち，活動できるよう配慮しなければならないと考える。そのためには，同学年・異学年を通して常により良い人間関係作りが必要となってくる。その人間関係作りの一手段として，縦割り班活動に着目し，さまざまな場面に生かせるよう配慮している。

・清掃時の活動・・・ 生活班表に従い，1週間交替で各清掃場所の清掃にあたっている。高学年が低学年の面倒を見ながらリーダーシップを取り，低学年は高学年を模範として，頑張る様子は，縦割り班活動における協力の態度の原点といえる。小規模校な

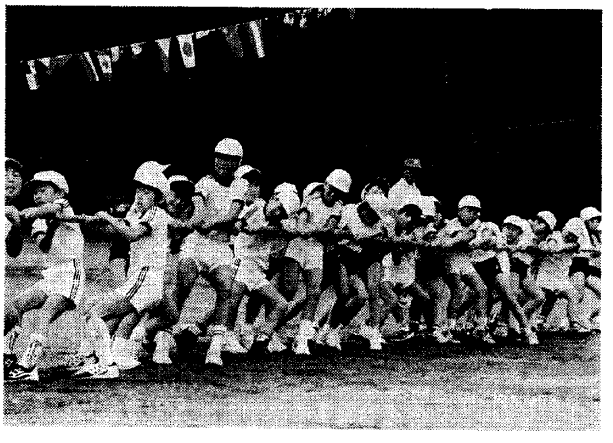
らではの活動である。

・宿泊学習での・・・活動　2泊3日の宿泊学習において，食事，ハイキング，ジャンボ自由時間等さまざまな場面において，協力する喜び，達成出来た喜びを実感し，班の強い連帯感が育てられている。

・生活班集会・・・　毎水曜日に朝の学習の時間を使い，話し合い活動と集会活動を実施している。児童は，この時間を楽しみにしている。集会担当の班は，司会や説明を行う係を自主的に決め，時には，低学年が班長の指導で「終わりの言葉」を言う場面もみられる。

・七夕集会・・・　児童会主催の集会活動である。3～4つの班が1グループとなり，休み時間などを利用し，飾り製作にあたっている。またいろいろなお店を出し，売手と買手にわかれて班ごとに買い物ができる計画も人気があり，児童の楽しみにしている行事である。

・運動会での競技・・・　偶数班，奇数班により紅白に別れ競技を行う運動会は，児童も楽しみにしている学校行事の一つである。紅白綱引き・応援合戦・全員リレーなど，班を中心として練習を行い，当日に備えている。また，ダンス・八木節なども班別に別れ，それぞれ楽しく演技が行なわれている。特に応援合戦においては，休み時間・放課後などの時間を自主的に活用し，練習に励み，人と人とのつながりの大切さを実感できる機会である。



○　地域の人々との交流

・七夕集会においては，地域の方やお年寄りを招待し，願い事を一緒に書き，飾り付けをしてもらう。

・運動会にお年寄りを招待し，お年寄りとのふれあいタイムを設け楽しい一時を過ごしてもらう。

・収穫祭の時，お年寄りを招待し，収穫したものを全員で試食してもらう。

・学芸会へのお年寄りを招待し鑑賞してもらう。

5．研究の成果と今後の課題

(1)　研 究 の 成 果

ア　「自然との積極的なかかわり」

自然に親しむ各行事を実施し，児童は様々な体験を肌で感じ，生き生きと何事にも取り組む姿勢が見られるようになった。また動植物に対しても優しく接する心が芽生えた。

イ　「基礎・基本の定着」　―― 算数科指導を中心として ――

○　低学年での成果

導入の段階におてい1年生の「買い物ごっこ」や2年生の本校で収穫した「じゃがいも」などを教材として使用することにより，児童一人一人が問題解決に当って意欲的に取り組むのに効果的であった。また，学習カード，作業用紙，タイルなどの活用においても，教師が一人一人の学習状況を把握し，個別に指導をすることで学習に対し意欲的に取り組む態度が培われた。

○　中学年での成果

3年生の「巻尺のしくみ」の学習においては，個人の記録をもとに導入とし，児童一人一人が巻尺の使い方について意欲的に学習ができていた。また4年生の「折れ線グラフ」の学習では，事前の温度記録をもとに学習問題を知り，自分でグラフをかこうという意欲を引き出すのに効果的であった。

○　高学年での成果

児童一人一人の考え方を引き出す工夫として，5年生では，「分数の性質を探ろう」において，児童のさまざまな発想に対処するために，折り紙や面積図を準備した。また6年生の「線対称の形」の学習では，合同な図形の識別掲示物，やぶれた「ほねなしだこ」の設計図の準備など，高学年の児童一人一人が自分の考え方を発表できるように教師側の周到な準備が行われた。これにより，児童の学習問題への意欲，関心が高まり学習内容の定着がなされた。

ウ　「人と人との豊かなつながり」

○　縦割り班活動

小規模校で人数が少ないということは，1年生から6年生までが一つの家族のように学校生活を送り，

名前はもちろん性格までも知っているというメリットがある。6年生を班長として日常生活の活動全般を通して，縦割り班活動を取り入れたことにより，思いやりの気持ちが育ち，協力して物事に対処しようとする態度が養われた。

○　地域の人々との交流

本校では，地域との連携を密にすべく，毎回各行事において保護者やお年寄りの方々を招待し，交流を図っている。この交流を通し，学校という存在がより身近なものとなり学校への協力・援助に役だっている。

(3) 今後の課題

ア　研究実践を行ってきて，三つの柱「自然との積極的なかかわり」「基礎・基本の定着」「人と人との豊かなつながり」は，松田小の中核をなすものと考え，今後もこの三つの柱から算数科における研究を深め，さらに他教科へと敷衍していきたい。

イ　算数科の導入段階を工夫した結果，児童への意欲関心が高まり「一人一人を大切にした授業の展開」ができたが，全体しとしての考えをまとめる工夫が十分とはいえなかった。一人一人を大切にしながら全体としてまとめて行くには，どのような工夫が必要か今後の課題である。

ウ　少人数学級の特質を生かしての縦割り班活動は十分に行われているが，同学年の活動においては，少人数であるがゆえに活動が制限されてしまう場合もある。このような場合には，少人数をどのように生かし指導するか今後の課題となる。

〔実　践　事　例〕

算数科学習指導案（第1学年）

1．単　元　名　ひきざん…2

2．単元の目標

(1)　10の合成，分解の学習経験を進んで生かし，計算のしかたを考えようとする。

(2)　数の構成に着目して，筋道立てて計算のしかたを考えることができる。

(3)　繰り下がりのある減法の計算ができる。

(4)　繰り下がりのある減法の計算のしかたがわかる。

3．単元と児童の実態

(1)　単元について

1年の減法は，これまでに加法の逆の計算として，加法と相まって発展させてきた。その内容としては，減法の意味（求残・求差）と（10－1位数）（1位数－1位数）の減法の理解を図る事と，（十何）－（何，十）の計算でいずれも繰り下がりのない場合を扱ってきた。

前単元では，1位数に1位数をたして繰り上がりのある加法を指導したが，本単元はその逆の減法で，11から18までの2位数から1位数をひいて繰り下がりのある減法を取り扱う。この場合も繰り上がりのある加法と同様，今後の減法の基礎となる計算なので十分な理解と習熟を図っていかなければならない重要な学習である。

計算のしかたとしては，代表的なものに減加法と減減法の2つがあるが，繰り下がりのある減法計算が確実にできるようにしておく必要性から，減加法を中心に指導していきたい。数を分解する操作が3回ある減減法に比べて，分解が2回と合成が1回の減加法のほうが，操作としても考え方としても，児童にとって容易であると考えられる。また，以後の筆算形式への発展も容易になると考えている。しかし，児童の実態に応じて

柔軟に扱っていきたい。

⑵ 児童の実態

1年生は，男子11名，女子4名の計15名である。学習や生活に対して意欲があり，活発な学級である。算数の学習においては，どの子も一生懸命にとり組む態度が見られるが，理解のはやい子と問題場面が理解できずに答えが導き出せない子との差が大きい。実態調査から，次のようなことが分かった。

〈準備テストの結果から〉

10の合成分解についての誤答は，国語的読み取りである助詞の使い方の理解が不十分なために，10と5をたしている児童が多かった。1位数－1位数の20題テストを2分間で行ったところ，全問正解者が9名，時間内に終わらなかった児童が5名であった。ほとんどの児童が指を使って計算していた。これらのことから，数の合成分解についての理解を確実にするための手立て，具体物の操作活動を多く取り入れた学習の展開など心掛けていかなくてはならないと感じた。

〈事前テストの結果から〉

本時の課題である（十何）－（何）で繰り下がりのある減法について，計算方法を理解していると思われる子が3名，不確実な子は6名，理解していないと思われる子が6名であった。ブロックを使わせなかったため，指を使っての数えびきで答えを出しており，間違いが多かった。

文章題で，ひきざんであることは14名わかったが，0児は全くわからなかった。準備テストでもひきざんの意味を理解していないことがわかっているので，本時で，初めにある数からいくつかをひくとのこりがいくつになるかということを理解させたいと考えている。

実　態　調　査　　11／1

	問題		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
準備テスト	10は，5と□		15	○	15	○	○	○	○	○	○	15	○	○	15	15	10
	13は，10と□		25	○	13	○	○	○	○	○	○	11	○	○	○	○	23
	9－5		○	○	○	○	○	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	16－4		2	10	2	○	○	11	○	○	○	5	○	○	○	○	15
	10－5－3		○	0	○	○	○	13	○	○	○	○	○	○	○	○	5
	17－7－2		6	8	○	○	○	15	○	○	○	○	○	5	1	○	5
	りんごが3こあります。2こたべました。のこりは，いくつになるでしょう。	しき 3－2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3-1
		こたえ 1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
	1位数－1位数　20題　2分間テスト		15	20	11	20	19	11	20	20	20	18	20	20	20	20	10
事前テスト	11－6		○	○	○	○	○	○	○	○	4	○	○	○	○	○	11
	12－3		1	○	1	○	7		○	○	○	○	○	10	7	○	14
	15－7		2	○	2	○	○	○	○	○	○	10	○	○	6	○	13
	17－9		3	7	1	7	○	○	○	18	○	12	○	○	7	○	14
	がようしが15まいあります。6まいつかいました。のこりは，なんまいになるでしょう。	しき 15－6	○	○	○	○	○	5-6	○	○	○	○	○	○	○	○	
		こたえ 9	1	○	1	○	4	5	○	○	14	5	○	○	4	○	

○は正解　　数字は誤答　　空欄は無答

(3) 指導の方針

1位数どうしのたしざん，ひきざんでも手を使って計算している児童がいることから，子ども達がいきいき活動する場の設定として，生活科単元「おもちゃをつくってあそぼう」の「じしゃくあそび」を導入に取り入れることにした。算数って楽しいな，おもしろいなという雰囲気の中で，「やる気」をもたせたい。そして，もらった菓子の数からお土産の数をひくとのこりはいくつか？という課題を自分のものとして受け止められるようにしたい。ひかれるかずを12，ひくかずを家族の人数（3～9）とするので，減加法だけでなく減減法，数えびきなど計算方法は異なると思うが，答えが正しく出せる事を大切にしたい。それから，徐々に10のまとまりを意識させ，繰り下がりの必要性に気付かせ，減加法になれさせていきたい。

4．指導計画

総時数　10時間扱い　（本時　1／10）

単元	時数	指導内容
ひきざん…2	3	・（＋何）－（何）＝（何）の減法の意味と計算　（本時　1／3）
	3	・（＋何）－（何）＝（何）の減法計算の理解と深化
	2	・減法適応の場合の理解の深化
	2	・（＋何）－（何）＝で繰り下がりのある減法計算の習熟

5．本時の指導

(1) 題材名　のこりは　いくつ

(2) 目標　・学習への興味をもち，進んで考えようとする。

・（12）－（何）の計算のしかたを考えることができる。

(3) 同和教育の視点

「じしゃくあそび」をする中で，友達と一緒に楽しく学習する喜びを味わい，お互いを認め合う気持ちを育てたい。

(4) 展開　別紙参照

(4) 展　　開

◎　同和教育上の配慮　　＊　研究主題との関連

具体目標	学習活動	時間形態	指導上の留意点（教師の支援）	評価・準備
・楽しく「じしゃくあそび」をする。	1．じしゃくあそびをする。 ・魚つり，やきいも，かき，りんごのグループにわかれてあそぶ。 ・カードとおかしを交換する。	15 一　斉 グループ 個　別	＊　生活科学習「あきをみつけたよ」「おもちゃをつくってあそぼう」と関連させ，魚つり，やきいも，りんごやかきもぎの場面設定をし，じしゃくあそびをさせる。つりあげたカードの裏に，おかしの名前があり，もらえることを告げる。 ◎　班長を中心に楽しく活動させる。	[じしゃくあそびのカード・道具] [シート・落ち葉他] [おかし] ・じしゃくあそびが楽しめているか。
・課題がわかる。	2．本時の課題をつかむ。 おかしを○こ　もらいました。 △こ　おみやげにします。 のこりは［いくつ］でしょう。	5 一　斉 個　別	・　おかしの数（12）から，家の人数分おみやげにすることを話し，自分で食べられる数（のこり）はいくつか考えさせる。 ・　掲示用一覧表におみやげの数（ひくかず）を記入させる。	・課題文の意味がつかめたか。 [作業用紙] [掲示用一覧表] [おみやげ袋]
・「ひきざん」であることがわかる。	3．立式，計算，答えの確かめをする。 ○　－　△　＝　□	14 個　別	・　初めにもらったおかしの数から，おみやげの数をひくとのこりはいくつかをとらえさせ，減法の場面であることを確認し，立式させる。 ◎＊　配慮児（A，C，F，J，0）については，様子をみながら援助指導をする。 ＊　その子なりの方法で答えを出させてから，おみやげを袋に入れさせるようにし，答えを確かめさせたい。	・ひきざんであることがわかり，答えが出せるか。
・全員が発表できる。	4．発表をする。	5 一　斉	＊　全員に発表させる。 ・　掲示用一覧表に，答えを確認しながら記入していく。	・答えが発表できるか。
・計算の仕方がわかる。	5．計算の仕方をまとめる。	5 一　斉	・　掲示用ブロックを用いて，12は10と2，2から（3～9）はひけないから，10からひくことを意識させてまとめる。（B児の12－9を例にとる。）	[掲示用ブロック] ・計算の仕方がわかったか。
・次時の予告を聞くことができる。	6．次時の予告を聞く。	1 一　斉	・　繰り下がりのあるひきざんの計算練習をすることを伝える。	・次時の学習に興味をもったか。

評

松田小学校では，平成8年度栃木県へき地複式分校教育研究大会の研究会場校として，研究主題「物事に生き生きと取り組む子供たちをめざして」のもとに，学校や地域の特色を生かした地域に根差した研究実践を発表しました。

本実践報告は，へき地・小規模校の一般的な（地理的，人的な）特性を

○　児童数が少ないため，一人一人の個に応じた指導が行いやすい。

○　地理的に豊かな自然に恵まれており，それらを教材化したり，体験活動に生かしたりすることができる。

○　地域が学校に対して期待，関心をもち協力的であり，学校・家庭・地域との連携・一体感が強い。

○　教職員組織が小さいため，共通理解が図りやすく，一体となった指導体制づくりがしやすい。

とプラスにとらえ，この4点を基盤として，本校の特色である「豊かな自然」や「小さい頃から同じ地域で育まれたこまやかな人間関係」を重視し，1つの学年が11～17名の小規模の学校のよさを生かし，地域や児童の特性を生かした「一人一人を大切にした授業を展開するための工夫」に取り組まれています。

その特色を，以下の3点に成果としてまとめてみました。

1　基礎・基本の定着を目指して，算数科の指導を中心に，きめ細かな実態把握と個に即した支援の工夫をしています。具体的には，日常の観察や準備テスト，事前テストにより，一人一人の興味・関心，つまずきなどを把握し，導入時や教材・教具の工夫及び個に即した支援の工夫をしています。例えば，学年の実態に応じて，体験的な活動（買い物ごっこ，幅跳びの個人記録の活用）や本校の豊かな自然を生かした取り組み（収穫したじゃがいも，温度観測の記録の活用など），学習カード，資料，作業用紙の工夫等をしています。

2　「自然との積極的なかかわり」を本校の教育の重要な柱の一つとして位置付け，豊かな自然環境を教材化したり，体験活動に生かしたりして自然を愛し，生命を尊重する豊かな心を育む教育計画を作成されています。

3　小規模校の特徴とも言える，児童数が少ないことによる児童間，児童と教師間の心のふれあいや結びつきが大変強いことのよさを一層生かし，よりよい人間関係つくりを目指して「人と人との豊かなつながり」重視して教育活動に取り組んでいます。また，豊かなつながりを地域に広げるものとして，地域の方々との交流を実践しています。

本校で研究実践されていることは，新しい学力観に立った一人一人を生かす実践研究であり，21世紀を展望する今後の教育の方向でもあります。各学校においても，本校で研究実践された，一人一人を大切にした教育の具体的な取り組みを，学校の実情に応じて参考としていただければ幸いです。